

書 評

重見之雄著：『海岸地域の利用と変貌』

古今書院 2000年6月 A5判 241頁
5800円（本体）

著者重見之雄は、丹念な史・資料分析や聴き取り調査をもとに、長年にわたり海岸地域の利用とその変貌についての研究を行ってきた篤学の士である。

氏の研究の中でも、その中心的課題である塩田の成立から拡大、消滅へと至る地域変容に関しては、産業史、土地制度史的にも評価の高い¹⁾『瀬戸内塩田の経済地理学的研究』²⁾がある。次いで氏は、塩田の所有形態とその変容について、土地台帳や塩業史に関する膨大な史・資料分析をもとに『瀬戸内塩田の所有形態』³⁾を著した。これについては、瀬戸内地域研究としても、また、膨大かつ克明な資料的価値といった点からも評価が高い⁴⁾。氏は、大学における卒論研究を端緒とする塩田研究以外にも、著者略歴からもわかるように、水産学部に勤務されていたこともあり、漁業経済学その他、多方面の業績を有している。したがって本書は、前二書に対して、より幅広い視点から海岸地域を対象とする研究業績の数々をまとめ直したものといえよう。

本書の具体的構成は次のようになっている。

はしがき—わが研究生活略史

第1章 工業開発と漁業補償問題

第2章 漁業に関する若干の問題

第3章 塩田をめぐる諸問題

第4章 和歌山県の農業的土地利用

第5章 インドネシア辺地の漁業

以下において、まず、章・節ごとにその内容を概観してみる。

第1章「工業開発と漁業補償問題」では、高度経済成長期における地域の活性化の切り札として、工業＝富の四大工業地帯から地方への分散を目的とした各地の臨海型工業地域開発が進んだこと、その用地確保のための埋立に当たり、生じてきた問題について論じている。具体的には、新産業都市に指定された徳島県と工業整備特別地域に

指定された広島県福山市の2つの事例から、埋立事業とそれに伴う漁業補償の経緯について詳細な分析を行っている。ここで著者は、一貫して弱者たる漁民を温かく見つめるヒューマニスティックな視点に立ち、彼らがどのような経緯で補償を受入れたのかだけでなく、その後の転業状況にまで言及している。そういった氏の研究姿勢は、「資本に奉仕する地方自治体の実態」（本文31頁）や「地方自治体による大資本の擁護」（同50頁）といった行政に対する批判的な言い回しの中に端的に表されている。

第2章「漁業に関する若干の問題」は、3節に分けて、それぞれの漁業問題について論及している。第1節は、和歌山県における大正期の漁業と題されている。ここでは、大正期の史・資料の不足を補うべく新聞記事情報を使い、動力船の普及と公害問題を2本の柱に、著者のいう漁業史上、近代化へ向けての激動の時代がどのような展開をみせたかについて明らかにしている。

第2節では、1970年当時の和歌山県田辺市江川まき網漁村、第3節では、1994年当時の鹿児島県串木野市の遠洋マグロ漁業が取り上げられている。この2研究は、時期も漁業拠点としての意味合いも、規模も全く異なる地域であるが、漁業史的把握と労働力、経営体の変容について、現場で働く人を中心に据えた分析視点が共通している。さらに、前者においては早くも後継者問題の顕在化が指摘され、後者においては経営体の淘汰と操業活動の大規模化、県外出身者や外国人が増えるといった労働者の質的変化が指摘されている。その上で、水揚母港基地化の失敗による地元経済の沈滞と浮揚策を模索している状況が明らかにされている。

第3章「塩田をめぐる諸問題」では、第1節の概要から説き起こし、和歌山県田辺市新庄地方、広島県尾道・向島塩田、愛媛県今治市波止浜塩田、備中の6塩田、讃岐の宇多津・丸亀、および詫間・仁尾の塩田が取り上げられている。研究の視点としては、前二書における手法を継承したものであり、塩田の開発から廃止、さらに跡地利用に至るまで、21枚の適切な時代別地形図や小字

図、土地利用図などを示しながら明らかにしている点と土地台帳等の資料を駆使して作成した4枚の所有形態変遷図を用いて克明な解説を行っている点が共通している。後者について、特に瀬戸内の十州塩田では、時代が下るとともに、当初の地元有力者に加え、浜子からの成功者の参入によって所有形態が分散化することと、その意味合いも蓄財の手段から生活の糧へと変化してきたことが指摘されている。

第4章「和歌山県の農業的土地利用」は、1965年当時の和歌山県の農業中心が米作から果樹栽培へと移行してきた実態について、市町村別統計をもとに分析している。それによると、全国有数の柑橘産地である和歌山県内でも、伝統産地と新興産地といった地域分化の認められること、果樹栽培地域の無制限な拡大が許されなくなりつつある状況下での対応の把握の必要性が指摘されている。

最後の第5章「インドネシア辺地の漁業」では、スラウェシ島とセラム島の4漁村について、多彩な写真と家屋配置図をもとにした実態分析を簡潔にまとめた近年の成果が盛り込まれている。

以上、本書の内容について紹介したが、著者の意図するところを十分に伝えることができたかどうかいささか心もとない。評者の力量足らざる点については、ご容赦願いたい。

本書は、章ごとにかなり色合いの異なる内容が盛りだくさんに取り込まれており、その点でも著者の多方面にわたる活躍が理解されるのであるが、ここで、それぞれの章に示された論及の各分野における評価、意義付けといった点についてふれてみたい。

第1章「工業開発と漁業補償問題」の初出論文が著されたのは、1968年前後の時期である。当時、わが国は1962年に制定された全国総合開発計画下で拠点開発方式がとられ、全国に指定された新産業都市（15地区）や工業整備特別地域（6地区）が具体的に動きだした時代であり、まさに地域開発、なにかんづく地方開発の時代であった。そのことは、地理学研究の分野においても端的に表れている。1952年以降の約半世紀のタームで『地理学文献目録』の地域開発の項目から、瀬戸内周辺地域に関する文献を練ってみると、全体で95を数えることができるが、そのうちの4割に当たる

38までが、1967～71年のわずか5年間に書かれたものである⁵⁾。そういった中で、海岸地域をフィールドとする著者が、高い意識を持って漁業補償問題に取り組んだことは時代の必然であり、細かな補償金額を提示しての経済的分析に止まらず、様々なデータを駆使して社会問題として捉えられている点も高く評価できよう。

第2章「漁業に関する若干の問題」の第1節では、先に述べたように漁業史・資料の欠落を補うために、新聞記事を練ることで大正期の和歌山県漁業の抱える問題について、項目別に解説している。当該期の漁業史については、著者も指摘するように、解明すべき重要な点が多い。なお、漁業史・資料の不足については、評者も地方漁業集落の調査を行う際に感じるところである。その理由として、機械化等技術革新が著しすぎることで、また、地方の漁業関係者は日々の漁業活動に追われ、技術革新の過程を記録に止めようという意識が希薄なことがあげられる。そういった場合に、新聞記事情報は、著者も指摘しているように（本文77頁）、全ての地域情報が網羅されているわけではないこと、特に話題性には乏しいが、学問的には重要な情報がもれている可能性も大きいといった資料上の制約、限界はあるが、そのことを十分考慮した上で分析検討が行われるならば、本節で扱われたように、貴重な地域データとなることが理解される。

第2節「和歌山県田辺市江川の漁業」が書かれた1970年頃のわが国の漁業は、戦後大量流入に起因する過剰就業が解消され、労働力不足に入る転換期にあたり⁶⁾、地方漁村における労働力問題に関する検討は、まさに時宜を得た研究といえよう。また、第3節「鹿児島県串木野市の遠洋マグロ漁業」も、著者が塩田研究において培った労働力を中心に据える研究手法を生かした分析がなされた。従来、個別の経営体の変遷にまで言及した漁業地理学的研究は少なく、その意味でも貴重な成果といえよう。

第3章「塩田をめぐる諸問題」は、先述のように氏が大学の卒論作成以来長年取り組み、既に大きな成果を蓄積されてきた、まさに真骨頂を發揮される分野である。塩田、ないし塩業の地理学的研究に関しても『地理学文献目録』を練ってみると、1952年以来43の文献があるが、そのうちの26

までが重見氏の著作になるものである⁷⁾。もちろん、『文献目録』中に列挙された著書と論文、報告書などを同じレベルで語ることはできないし、業績の数だけで内容が評価されるものでもないが、特定分野の6割強を執筆されているという事実については、ただただ驚嘆するのみであり、まさに第1人者としての評価はゆるぎのないものといえよう。

第4章「和歌山県の農業的土地利用」の初出は、和歌山高専研究紀要5(1970)と思われる。農業的土地利用の展開と変容というテーマは農業地理学のみならず、地理学の中心的テーマとして長年の蓄積がみとめられる。そういった中でも、本章は、和歌山県域というメソスケールにおいて統計分析を中心に農業的土地利用の地域構造に関する予察的研究として評価されよう。農業構造の変質が進みつつある時代にあって、今後の展開に注目すべきという指摘的を射たものといえる。ただあえていえば、和歌山県全域を対象とした農業研究という本章の内容は、本書のタイトルである『海岸地域の利用と変貌』に含めるにはいささか無理があるようにも思える。本書のはしがきにおいて、著者は、各章・節の執筆経緯と初出をあげて説明しているが、本章に関する部分が欠けており、ここで、著者による本章の位置づけがなされておればといった点が惜しまれる。

第5章「インドネシア辺地の漁業」についてみてみよう。漁村、ないし漁業研究は、経済地理学、文化地理学、村落地理学など、多方面からの考察が可能であり、比較的早くから海外調査の進んだ分野でもある。近年のインドネシアに関する漁業についても、北窓らの一連の研究がみられる⁸⁾。本章は、短文ながら、理解を深めるための地図や写真がふんだんに盛り込まれたきわめて地理学的なモノグラフといえ、既存データの得られにくい海外調査の一方を示している。

以上、本書に関する各章・節ごとの内容解説とその学問的意義について論評を加えてきた。本書の構成として、第5章まで、非常に精緻な地域研究に基づく成果が展開するのであるが、一言付言するならば、6番目に最終章を設けて、研究成果の総括がなされておればといった点が惜しまれる。もっとも、この点をもって、本書の評価がいささかも減ぜられるものではない。

著者の手になる前二書が、氏のライフワークともいえる塩田のみにテーマを絞ってすばらしい成果をあげておられるのに対して、本書は、塩田がわが国から消滅した後を受けての氏の研究その後をまとめられたものといえる。同時に本書は、篤学の士の血と汗のにじむような努力の痕跡を記した氏の研究者としての「生きざまの証」(本書はしがき8頁)の書でもある。塩田、ないし海岸地域をキーワードに歴史地理学、水産地理学、漁業経済学のはざまを一筋に走ってこられた氏の足跡は、同様の道を歩きながら、ふらふらと腰の落ちつかない評者のような後進にとって、進むべき道を照らす灯明のように輝く存在に感じられた。

【注】

- 1) 村上節太郎「書評 瀬戸内塩田の経済地理学的研究」, 地理学評論57-8, 1984, 592頁。吉田隆彦「学界展望 第二次産業」, 人文地理37-3, 1985, 57頁。
- 2) 重見之雄『瀬戸内塩田の経済地理学的研究』, 大明堂, 1984, 1~338頁。
- 3) 重見之雄『瀬戸内塩田の所有形態』, 大明堂, 1993, 1~370頁。
- 4) 正井泰夫「書評 瀬戸内塩田の所有形態」, 地理学評論66A-7, 1993, 425頁。島田正彦「学界展望第一次産業(水産)」, 人文地理46-3, 1994, 56頁。
- 5) 人文地理学会編『地理学文献目録 第2集』, 柳原書店, 1957, 239頁。『同 第3集』, 柳原書店, 1963, 299頁。『同 第4集』, 大明堂, 1968, 397~398頁。『同 第5集』, 大明堂, 1973, 329~331頁。『同 第6集』, 大明堂, 1978, 348~349頁。『同 第7集』, 大明堂, 1984, 389~390頁。『同 第8集』, 大明堂, 1989, 294~295頁。『同 第9集』, 古今書院, 1993, 199~200頁。『同 第10集』, 古今書院, 1998, 256頁。
- 6) 岩崎寿男『日本漁業の展開過程-戦後50年概史-』, 舵社, 1997, 23~24頁。
- 7) 人文地理学会編『地理学文献目録 第2集』, 柳原書店, 1957, 211頁。『同 第3集』, 柳原書店, 1963, 260~261頁。『同 第4集』, 大明堂, 1968, 338~339頁。『同 第5集』, 大明堂, 1973, 284~285頁。『同 第6集』, 大明堂, 1978, 305~306頁。『同 第7集』,

大明堂, 1984, 357~358頁。『同 第8集』, 大明堂, 1989, 262頁。『同 第9集』, 古今書院, 1993, 183頁。『同 第10集』, 古今書院, 1998, 239頁。

- 8) 北窓時男「インドネシアにおける伝統漁業の近代の変容」, 漁業経済論集35-2, 1994, 153~170頁。同「地縁技術の形成とその危

機」, 漁業経済論集36-1, 1995, 81~100頁。同「インドネシアにおける巻網類漁業の地理的展開」, 漁業経済論集36-2, 1995, 151~172頁。同「マルク海におけるカツオ一本釣り漁業の展開」, 漁業経済研究37-2, 217~235頁。

(中村周作)